

2025 年度

全学部統一入学試験 I 期問題（2 月 3 日）

国 語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
2. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

① 受験番号欄

受験番号を英字及び数字で記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

② 氏名欄

楷書でていねいに記入しなさい。

③ 解答科目欄

解答する科目を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

4. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の例のように解答番号10の解答欄の③をマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
1 0	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

5. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

I 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

明らかに、社交の理念がいちじるしく衰弱した現代ではあるが、それでも人びとは現に社交を行い、社交について一定の常識は備えている。その常識によれば、社交とはおよそどのようなものとされているであろうか。たいていの人が第一にあげるのは、友人との関わりであり、友情を確かめたり強めたりするさまざまな行動だろう。正式な招^(ア)エンや気軽なパーティー、さらに手軽な茶話の集まりから電話の会話まで、その種類は広範をきわめている。そうした機会をつくる行楽やゲームやスポーツ、芸術の鑑賞や軽度の学習、あまり深刻でない社会奉仕の活動もそれ自体が社交と呼ばれる。結婚式や葬式、祭りのような宗教行事も、それに周加的に加わる人びとには一種の社交として感じられている。そのさい周加的とはいってもなく、参加者が行事の主催者ではなく、かといってたんなる傍観者でもなく、いいかえれば主催者の友人の距離にいるということにほかならない。

また社交はこのような友人関係の延長として、そのあいだで交わされる贈与の行為をも含んでいる。随時のプレゼントや慣習化された人生の節目の祝^(イ)ギ、さらに制度化された季節の挨拶や冠婚葬祭の贈答にいたるまで、この贈与の種類もきわめて多い。贈与にはたいていお返し^(ウ)の習慣が伴うから、これは経済的な交易の関係にも似ている。しかしここでも贈与の交換は友人のあいだに限られ、交易のように範囲が無限定に広がるということはない。ある他人が贈り物をするにたるあいてかどうか、どんな贈り物が適当であるか、人は友人の親^(ウ)ソの程度を慎重に計るのである。

常識というのは面白いもので、この友人という言葉のなかに、すでに社交の本質を探りあてて最初の鍵が隠されている。友人とはもちろん家族や血縁の親族ではなく、また地縁が（ i ）につくりだす共同生活

者でもない。ときに近隣の居住者が友人になることはあるが、そうなるかどうかは必然的ではない。むしろ真の友情はそうした強制的な人間関係に縛られることなく、しばしばそれに逆らってさえ結ばれる絆だと考えられる。友人とは個人が自由に選んでつくる知己^aであって、その結びつきはどんなに強くても、あくまでも意識の積極性に支えられている。無意識のうちにも存続し、あるいは意識が拒否しても消えることのない、地縁や血縁の関係とは決定的に違うのである。

とはいうものの、友情はまた一定の目的のもとに結成された、いわゆる組織の団結心とも異なっている。組織の仲間はいうまでもなく意識的にあいてを選びあうが、その選択は逆にも意識的に行われるといえる。彼らは目的に照らして戦術的に最適の同志を選び、原則として目的実現に必要とされる範囲でだけそれとつきあう。ときにそこに偶発的な友情が芽生えることはあっても、それはどこまでも本来の団結心の副産物にすぎない。しかもその友情は組織の団結を強める場合もあるが、逆に「(ii)」となって目的実現を妨げることも稀ではない。同じ選択でも友人の選択は本質的に基準が曖昧であって、組織の要求する厳密な基準とは重ならないことが多いのである。

ちなみに、友情にはしばしば「芽生える」という表現が行われるが、この言葉そのものがすでに示唆的だといえる。友情は組織仲間の選択に比べてどこか自然発生的であり、意識が完全にはつくりだせないものと考えられている。「虫が好かない」^bとか「うまがあう」などという俗語は、友人の選択基準が曖昧であることを示すとともに、選択の意識そのものが十分に強くないことを暗示している。友情は意識が選びとりながら、なかば意識にたいして与えられるものであり、意識は友情にたいして積極的であると同時に受動的に向かいあっている。地縁や血縁の関係が（i）であり、組織仲間の選択が自由な理性の営みだとすれば、友情はその中間にあって、自由でありながら非合理的な側面を含むのである。

そしてその意味では、友情は人間関係のさらにトウ酔的^cな感情、たとえば恋愛に似ていると見ることがで

きる。たしかに恋愛は異性のあいだであれ同性のあいだであれ、ある日突然に「芽生える」ものであり、しかもそれにもかかわらず、愛する人間はその感情を自由に選びとったと感じている。恋愛感情にたいして人は身をまかせると同時に、積極的にそれをわがものとして引き受けるのであって、その点では恋愛と友情は同じかたちをしているといえる。現に友情だと思われていたものが恋愛に変わったり、逆に恋愛が醒めて友情が残ったりする例も珍しくない。〈中略〉

しかしふたたび常識に返れば、恋愛と友情は明らかに違うのであって、そこに一線⁽⁴⁾をカクするものは（iii）を容れうるかどうかの区別だといえる。二人の人間関係に（iii）がはいりこんできたとき、それに嫉妬を感じるかどうか、また嫉妬を抱くことに正当性を感じるかどうかという違いである。とくに指標として重要なのは後者の正当性の道徳感情であって、人は嫉妬を抱いてよい場合と悪い場合を、自然な感情によってかなり明快に区別している。〈中略〉恋愛は二人の人間関係を閉鎖的なものにするが、友情は原則的に、つねにより広い交友関係に向かって開かれている。当然、人がその感情に没入してトウ酔する度合いからいっても、友情は恋愛に比べて淡泊で抑制されたものになるはずである。

ついでながら、ここで注意しておかなければならないのは、人間の感情という複雑な現象について考えるさいの方法論である。第一に忘れてならないのは、感情には明らかにさまざまな種類の区別があるが、その違いは一本の線を引いて示すことはできないということである。それはちょうど虹の七色が境界線で区切れないように、それぞれの接点では^b滲みあつてつながっている。だが誰もが知るように、どの色も中心点をとれば特徴は明瞭であつて、その性質はけつして同質のもの程度の違いではない。同じように、友情と恋愛感情もその接点では紛らわしく連続しているが、だからといって両者が同一の感情の程度の違いだと見るのは誤っている。赤と緑が色として異質であるように、二つの感情は本質において異なっており、ただ現実の現れかたにおいて連続していると考えるべきであろう。

もう一つややこしいのは、人間の感情はしばしば価値の感覚と結びついており、ある感情を抱くことと、それを抱くことが正義だと思ふ感情が重なりあうことである。交遊を楽しむ感情も、人を熱愛する感情もとかく倫理的な感情を伴い、それを貫くことが正義だという信念と結びつきやすい。そうになると、友人や恋人を裏切るのはあいてが可哀想だというより、自分自身の価値観、誠実を裏切ることだから悪いという感情が芽生えてくる。そして多くの場合、人はもとの感情よりも後者の価値観にしたがって行動を起こすから、現象の分析が難しくなるのである。

〈中略〉

さて、これだけの注意をしたうえで考えを進めることにすると、さしあたり社交とは人が友情の関係を結び、それを育てるための行動だと定義できそうである。繰り返すが普通、人は家族のつながりを固め、恋人への思いを高め、戦闘集団の団結を強めるための行動を社交とは呼ばない。関係する人間の範囲が限定され、そこへ参入する資格があらかじめ局限されているような関係を社交とは呼ばない。さらにこのことに対応して、その関係のなかで共有される感情もまた、第三者の共有を許さないような強烈な情熱はそぐわないといえる。恋愛感情や真剣な闘争心はもとより、より広く見ても、怒りや恐れや憎しみ、強烈すぎる悲しみなどを共有して行われる社交は考えられない。社交を支える感情としては、喜び、祝意、博愛に近い愛、同情に近い悲しみ、漠然とした一般的な敬虔さ、それに遊戯化された競争心などを思い浮かべるのが、まず常識的といえるべきだろう。

しかし、このように社交を第一に感情のありかたから考え、友情という感情に結ばれた関係として定義するのは、ひょっとすると議論の順序が逆なのかもしれない。先に、友情は「芽生える」ものである反面、意

識が積極的につくりだすものであることを見たが、この後半の側面に注目すれば、大切なのはそのつくりかただということになるからである。正しく考えなおせば、むしろ社交という行動のどのような性質が友人関係を育て、抑制され開かれた感情をつくりうるのかを、まず見るべきなのかもしれない。

(山崎正和『社交する人間』による)

問一 空欄 (i) (ii) (iii) にあてはまる言葉として最も適切なものを、それぞれ①～④のうちから一つ選びなさい。

(i)	1	① 人工的	② 宿命的	③ 開放的	④ 邇及的
(ii)	2	① 弛緩	② 公認	③ 私情	④ 皮相
(iii)	3	① 家族	② 血縁	③ 親友	④ 第三者

問二 傍線部(A)「真の友情はそうした強制的な人間関係に縛られることなく、しばしばそれに逆らってさえ結ばれる」とあるが、この意味として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

4

- ① 友情は家族や血縁、地縁とまったく無関係に成立する。
- ② 友情は家族や血縁、地縁から逃れることで成立する。
- ③ 友情は家族や血縁、地縁の中の誰かに紹介されて成立する。
- ④ 友情は家族や血縁、地縁を離れた個人の自由な選択に基づく。

問三 傍線部(B)「虫が好かない」とあるが、この意味として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ

選りなさい。

5

① 虫が食い荒らす

② 昆虫が嫌いである

③ 身勝手である

④ なんとなく好感がもてない

問四 傍線部(A)～(オ)にあてはまる漢字を含む熟語はどれか。最も適切なものを、それぞれ①～④のうちから

一つ選りなさい。

(ア) 招エン

① 縁故

② 宴会

③ 楕円

④ 終焉

(イ) 祝ギ

① 演技

② 義理

③ 議事

④ 儀式

(ウ) 親ソ

① 素朴

② 阻害

③ 疎外

④ 先祖

(エ) トウ酔

① 陶器

② 統治

③ 等級

④ 当番

(オ) カクする

① 書物

② 画家

③ 格上

④ 視覚

問五 傍線部 a～c の漢字の読みとして、最も適切なものを、それぞれ①～④のうちから一つ選りなさい。

a 知己

① ちこ

② ちき

③ ちみ

④ しりあい

b 滲み

① すす

② よど

③ から

④ にじ

c 敬虔

① けいけん

② けいあい

③ けんきよ

④ けいりよ

問六

傍線部(C)「感情には明らかにさまざまな種類の区別があるが、その違いは一本の線を引いて示すことはできない」とあるが、その理由として筆者はどのように考えているのか。最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

14

- ① さまざまな感情は、その接点では連続しているから
- ② さまざまな感情は、名前がつけられているように区別されるから
- ③ さまざまな感情は、名前が違っても結局は同一の感情だから
- ④ さまざまな感情は、その強度が異なることで感じられ方が違うから

問七

傍線部(D)「友人や恋人を裏切るのはあいてが可哀想だというより、自分自身の価値観、誠実を裏切ることだから悪いという感情が芽生えてくる」とあるが、その理由として筆者はどのように考えているのか。最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

15

- ① 人は相反する感情を持つことがあり、その処理に困るから
- ② 人は相手のことよりも、自分のことに注意や関心を持つから
- ③ 人は相手を責めるよりも、自分を責める方が楽だから
- ④ 人は自分の感情を倫理的に判断して、それに基づいて行動するから

問八 筆者は社交と友情との関係についてどのように考えているのか。最も不適切なものを、次の①～④の

うちから一つ選びなさい。

16

- ① 社交は、友情と同様に自然発生的に生じる面もある。
- ② 社交は、恋愛と同じように強い感情を持つようになる。
- ③ 社交は、友情と同様に適切な距離を必要とする。
- ④ 社交は、友情と同様に意識的に作りだすものである。

Ⅱ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

枕詞と序詞というシユウジについて、抱いた第一印象は「もったいない」だった。いっぽう同じシユウジ技法の一つである掛詞かけことばと本歌取りほんかのことを聞いた時には「おお、これは得だ」と思った。

掛詞とは、一つの言葉に二つの意味が掛けられているもので、たとえば「ながめ」に「長雨」と「眺め」の両方の意味を持たせる、といった具合。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに 小野小町（『古今集』春下）

掛詞といえばこの歌、というくらい有名な一首だが、「ながめ」とともに「ふる」には、「（世に）経る」と「（長雨が）降る」が掛けられている。

「長雨―降る」ラインで訳すと「桜の花の色は、早くも移ろってしまった。いたづらに長雨が降っているあいだに……」となり、「眺め―経る」ラインだと「私の容貌も衰えてしまった。ぼんやりと無駄なもの思いにふけているあいだに……」となる。

もちろん、この二つのラインは、くつきりと分かれているわけではなく、二本の紐がラセンジョウ(1)にからまりあって一本になっているような感じである。その一本の紐が、この一首なのだ。桜の花のはかなさと、女のためいきとが重ねられ、紐は互いのイメージを広げあう。

「二粒で二度おいしい」というキャラメルがあつたけれど、掛詞とは「一言で二度おいしい」言葉なのである。短歌の場合、三十一文字と限られているので、そのおいしさはひときわとも言えるだろう。

本歌取りもまた、限られた文字数の中で、より複雑で奥行きのある世界を築こうとして、開発された技法

の一つである。

元になる本歌があり、その一部を借りてくることによって、本歌のイメージを、まず提出する。そして、さらに何か新しい展開を、自分なりにつけ加える。つまり本歌が三十一文字かかって表現したものを、その一部で代用してしまい、残りの文字数を使ってさらに表現を広げるわけである。^(A)これもなかなか、おいしい話だ。

志賀の浦や遠ざかりゆく波間よりこほりていづる有明の月 藤原家隆
〔新古今和歌集〕冬

まずは、この歌の本歌のほうを読んでみよう。

さよふくるままにみぎはやこほるらむ遠ざかりゆく志賀の浦波 快覚
〔後拾遺集〕冬

志賀の浦は、琵琶湖の湖岸で、現在の津市があるところ。夜が更けるにしたがって、水際はだんだん凍ってゆくのだろうか、と作者は思う。なぜなら、湖岸に打ち寄せる波の音が、しだいに遠ざかってゆくから……。

波の音以外は何も聞こえないほど、しーんと静まりかえっていなければ、そして、その微妙な変化を聞きわけるほど、作者の精神が^(ウ)トギ澄まされていなければ、とても生まれない歌である。現実には風景は見え、音のみは^(B)ずなのだが、読んでいるうちに、冷たく暗く森閑とした風景が頭の中には描き出されてくる。それはたぶん、作者の心象風景でもあるのだろう。

さて、この歌を本歌にした家隆の作品のほうはどうだろうか。

「志賀の浦や遠ざかりゆく波間より」と、上の句ではまず、快覚の世界が提出される。ここまで読んだ読者の頭には、あの冷たく暗く森閑とした凍りゆく湖が、ぱあっと広がることだろう。その湖に「こほりていづる有明の月」が登場する。凍ったように冷たい光を放ちながら、波間から現れる有明の月。本歌の、音と暗闇の世界に、（ i ） がつけ加えられた。凍った月の光によって、暗闇はいっそう暗く、湖はいっそう冷たく感じられる。

このように、一つのイメージを踏まえてさらに飛躍する本歌取りの手法は、一首に複雑な奥行きを与えてくれる。読者は、本歌がどうトリミングされているかを、合わせて味わう楽しさを得るのである。

同じ快覚の歌を本歌にしていると思われる作品が、現代短歌にもあるので、くらべてみよう。

湖凍りつつある音よ失いしわが日と木の葉とじこめながら 寺山修司

湖岸から次第に凍ってゆく湖の様子を、（ ii ） で捉えているという設定は、まさしく快覚の歌の世界である。そしてこの作品の個性は、本歌にあった心象風景的な要素が、さらに色濃く表現されている点だろう。また、湖が凍るということは、湖という巨大な器に蓋がされるということなのだ、という視点も、新しく取りこまれている。

表面を氷にオオ(三)われてゆく湖。その下には、「失いしわが日と木の葉」がとじこめられつつあるのだ、と作者は感じている。湖の底に沈んでいるものといえ、木の葉のほうは誰が思いつくことだろう。「失いしわが日」が、それと並べられることによって、いっきに象徴的な風景となっている。古歌をふまえながら、すぐれて現代的な一首だ。

が、この発想は、そもそも快覚の歌からのチヨウハツ(オ)があって生まれたものではないかと、私は思う。つ

まり、「さよふくるままにみぎはやこほらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」の歌に出会ったとき、作者は「見つけた」思ったのではないだろうか。長いあいだ行方不明になっていた、わが失いし日々。それらはきつと、こんな冷たく暗い湖の底に、とじこめられているにちがいない……。

そこで、「湖凍りつつある音よ……」の一首が生まれた。ここには、本歌取りという手法の、ひとつの理想的な姿がある。

ところで、まことにわかりきったことだけれど、読者が本歌を知らなかったら、本歌取りというのは、まるで意味をなさない。広く短歌が人々に覚えられていた時代にくらべると、現代は本歌取りをするには、かなり不利な時代だろう。教科書に登場するものや百人一首の歌ぐらいしか、安心して本歌としては使えない。

(俵万智『短歌をよむ』による)

問一 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ①～④のうちから一つ選びなさい。

(ア) シュウジ

17

- | | |
|-------------|-------------|
| ① 印刷機でインジする | ② セイジに関心をもつ |
| ③ 出場をジタイする | ④ シジに従う |

(イ) ラセンジョウ

18

- | | |
|----------------|---------------|
| ① センチャク順に受けつける | ② 右へキュウセンカイする |
| ③ センコウをたく | ④ 新しい商品のセンデン |

(ウ) トギ澄まされて

19

- | |
|-----------------|
| ① 費用をサクゲンする |
| ② ボウエキマサツを解消する |
| ③ コウキュウシセツを利用する |
| ④ 生物学をケンキュウする |

(エ) オオわれてゆく

20

① フクスイ盆に返らず

② 命令のフクシヨウ

③ リシユウ届けを提出する

④ 病人をカクリする

(オ) チヨウハツ

21

① 時代のチヨウリュウ

② 事情をチヨウシュする

③ 予算がチヨウカする

④ 新たなチヨウセン

問二 傍線部(A)「これもなかなか、おいしい話だ」とあるが、そう思った理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

22

- ① 限られた文字数で、より多く、深く表現できるから
- ② 本歌の一部を借りてくれば、格調高いものになるから
- ③ 自分で創作しなくても、半分はすでにできているから
- ④ もとになる本歌をよりよく鑑賞できるから

問三 傍線部(B)「作者の心象風景」とあるが、作者はどのような精神状態にあるのか。最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

23

- ① 鋭敏な感覚で世界をとらえている精神状態
- ② 微妙な音の変化で不安になっている精神状態
- ③ あまりの静けさに戸惑っている精神状態
- ④ ありもしない幻聴にとらわれている精神状態

問四 空欄（ i ）にあてはまる表現として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

24

- ① 鮮やかな視覚的要素
- ② 寂しい心象風景的要素
- ③ しーんとした聴覚的要素
- ④ ひんやりとした触覚的要素

問五 傍線部(C)「本歌がどうトリミングされているか」によって読者が味わえる楽しさとは何か。最も適切な

なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

25

- ① 本歌の作者の意図を理解する楽しさ
- ② 本歌と本歌取りの歌の優劣を評価する楽しさ
- ③ 本歌の内容がどのように凝縮されているのかを知る楽しさ
- ④ 本歌の内容にどのようなことが付け加えられているのかを知る楽しさ

問六 空欄（ ii ）にあてはまる語句として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

26

- ① 目
- ② 耳
- ③ 手触り
- ④ 五感のすべて

問七 傍線部(D)「象徴的な風景」とあるが、それは何を象徴しているのか。最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

27

- ① 湖岸から次第に凍ってゆく湖
- ② 本歌で詠まれた志賀の浦の風景
- ③ 心の底に沈んでいる「失いしわが日」
- ④ 湖にとじこめられて、底に沈んでいる木の葉

問八 傍線部(E)「安心して本歌としては使いにくい」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

28

- ① 情報化社会では、本歌が容易に見破られてしまうから
- ② 現代では、本歌取りは盗作とみなされるから
- ③ 現代の短歌は、象徴的な風景を表現するものが多いから
- ④ 現代では、短歌は広く人々に知られているとは言えないから

問九 次の各文について、本文中の内容と合致するものには①を、それ以外のものには②を選びなさい。

29

掛詞と本歌取りというシュウジ技法は、枕詞や序詞と同じように限られた文字数の中で奥行きのある世界を築く効果がある。

30

掛詞は、同音異義語を使って、完全に独立した短歌を二首作るようなもので、「一言で二度おいしい」言葉である。

31

本歌取りのシュウジ技法によって、本歌から発想を得て作者自身の世界を表したり、奥行き
の深い世界を築いたりできる。

32

本歌取りを楽しむために、私たちは教科書に登場するものや百人一首だけでなく、広く短
歌を知り教養を深めるべきである。

Ⅲ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

まずつぎの日本神話を見てください。

さてホノニギノミコトは、笠沙かささの岬で、美しい乙女に出会った。そこで「おまえは誰の娘か」と尋ねたところ、答えて「オオヤマツミノカミの娘、名前はカミアタツヒメ、またの名はコノハナサクヤヒメといします」と申した。またニギノミコトが「おまえには兄弟はいるか」と尋ねたところ、答えて、「私の姉、イワナガヒメがいます」と申した。そうしてニギノミコトが「私はおまえと結婚しようと思う。どうか」と仰せられたところ、「私は申し上げられません。私の父、オオヤマツミノカミが申しましょう」と申した。そこでその父のオオヤマツミノカミに求めて使いを遣ったところ、オオヤマツミノカミはおおいに喜んで、その姉イワナガヒメを添えて、たくさんたくさんの結納品を台に載せて持たせて、差し出した。そうしたところ、その姉はたいへん醜みにくかったので、ニギノミコトは見て恐れて送り返し、ただその妹コノハナサクヤヒメだけをとどめて、一夜の交わりをもった。これに対し、オオヤマツミノカミは、イワナガヒメを返してきたため大いに恥はずかしく思い、申し送って、「わが娘を二人とも差し上げたわけは、イワナガヒメを召し使いなされば、天つ神である御子の命は、雪が降り風が吹いても、つねに岩のように、いつまでも堅く動かずいらっしゃるだろう。またコノハナサクヤヒメを召し使いなされば、木の花の咲くようにお栄えになるだろうとウケイウケイ（誓約）をして、差し上げたのです。このようにイワナガヒメを帰らせて、ひとりコノハナサクヤヒメだけをとどめたために、天つ神である御子の御寿命は、桜の花のように短くあられるでしょう」と言った。このために、いまに至るまで天皇たちの寿命は長くないのである（『古事記』神代上巻）。

〈中略〉

次は、以下のようなインドネシア（ポソ族）の神話を見てみましょう。

はじめ人間は、神が縄に結んで天空からつりおろしてくれるバナナの実を食べて、いつまでも命をつないでいたが、あるときバナナの代わりに石が降ってきたので、食うことのできない石などは用はないと、神に向かって怒った。すると神は石を引っ込めてまたバナナをおろしてやったが、そのあとで「石を受け取っておけば、人間の寿命は石のように堅く永く続くはずであったのに、これを斥けてバナナの実を望んだために、人の命は、今後バナナの実のように短く朽ち果てるぞ」と告げた。それ以来、人間の寿命が短くなって、死が生ずるようになった（松村武雄『日本神話の研究』〔第三卷〕培風館）。

語り口はとても（a）ですが、これもまたみごとな神話です。いかにも人間がしでかしそうなことではありませんか。はじめは、天から降りてくるバナナを食べていればよかった、それで満足して神様のことを信じきっていれば人間は死ぬことはなかった。ところが、天の神が（b）を利かせて石を降らせた。そこで人間ははじめて天に（c）態をついてしまったのです。神様はこう言います。「その態度はなんですか。だったらいいですよ。これからはバナナだけをあげましょう。ただしあなたがたは石のように堅固な命を失うでしょう」といった。だから人間は、バナナのように（d）果てる命しか持たないとこの神話は語るのです。

この神話は中央セレベスの島で語られていたものです。⁽¹⁾この神話がコノハナサクヤヒメとイワナガヒメの神話にびっくりするほどよく似ていることは、昔から気づかれていました。ここでは、植物と石の対立が単

純（ a ）に語られています。バナナの実は柔らかくておいしいけれども、ほっておくと腐ってしまいます。石は硬くて食べられないけれど、腐ったりすることがありません。硬く腐らない石を人間が受け取っていれば、死などはもたらされなかったのに、柔らかくて腐りやすいバナナを取ったために、寿命が与えられたのです。『記紀』の神話は、これよりももっと（ e ）された語り口を持っていますが、神話的な論理構造はまったく同一です。サクヤヒメの本体とはどうもバナナのような植物だったということになるかも知れません。ここでは、植物／石、硬いもの／柔らかいもの、腐らないもの／腐るもの、という（ f ）的対立が使われているのがわかります。

ベネズエラのシパヤ族の神話を見てみましょう。やさしい神様がいて、不死になる方法を人間に教えてくれました。

創造神は人間を不死にしようと思った。そこで人間に水辺に住んで、前を通り過ぎていくカヌーのうち、最初の二艘はやりすごして、三番目のカヌーをとどめて、そこに乗っている精霊を拝んで、抱gようしなさいと教えた。最初のカヌーはたくさん腐った肉を詰めた籠をのせ、たいへんな悪臭を放っていた。人間たちはそのカヌーに走り寄ったが、あまりの悪臭に退散した。彼らはこのカヌーには「死」が積gんであるのだらうと考えた。「死」を積gんでいたのは二番目のカヌーで、それは人間の形をしていた。そのために人間たちはその人の形をした「死」を温かく迎え入れ、抱gようしたのである。

創造神が三番目のカヌーに乗ってやってきたとき、彼は人間たちが「死」を受け取ってしまったことを知った。蛇や木々や石は、不死の精霊の到着をちゃんと待っていたのである。そこで人間は死ぬのに、これらの生命は古い皮を脱ぎ捨てて若返るようになったのだった（Claude Lévi-Strauss *Le Cru et le Cuit*、

Paris, Plon)。

禁止されていたにもかかわらず、最初のカヌーに走り寄っていきます。ここが人間の情けないところです。やめろと言われると、かえって禁止を破るのです。すると大変な悪臭のする、腐った肉が積んであった。それが「死」というものであろうと判断して、やりすごしました。二番目のカヌーがやってきました。そのカヌーには普通の人間が乗っていました。人間ならばちゃんと迎えなくてはいけないと考えたわけです。ところが、「人間」というのは、実は死すべき生き物としての人間のことだったのです。最初のカヌーに積んであった腐肉の中には死などはありませんでした。それを人間はかん違いしてしまっただけです。

人間は禁止を破ることもできる自由な存在です。ほかの動物たちは遺伝子に環境世界とのつきあい方までしっかり書きこんでありますから、その点では自由はあまりありません。だからすなおに神様の言うことを聞くのです。ところが人間はこの自由によって大失敗をしでかしたのです。言われたとおり三番目のカヌーをお迎えしていればよかったものを、間違って二番目のカヌーから死を受け取ってしまいました。しかし、人間以外の動物は、一番目や二番目のカヌーをきちんとやりすごすことができ、おかげで再生をくり返す生き方を与えられました。

現代の人類はこのときの失敗を取り戻そうと、医学を発達させて、寿命を延ばそうとしているのでしょう。しかもそのことが、「死」にも打ち勝つことのできる、人間の自由をあらわしていると思っていますが、さて、それはどうなのでしょう。「死」を与えられたことと人間の自由とは一体なのだと、この神話は語っています。(A) 神話も後世の多くの哲学者たちも、その点では同じことを言っています。

(中沢新一『人類最古の哲学』による)

問一 空欄（ a ）（ f ）に入る最も適切なものを、それぞれ①～④のうちから一つ選びなさい。

（ a ）	33	① 質素	② 豪胆	③ 素朴	④ 奇抜
（ b ）	34	① 心	② 頭	③ 手	④ 気
（ c ）	35	① 悪	② 失	③ 叛	④ 犯
（ d ）	36	① 多く	② 濃く	③ 朽ち	④ 甘く
（ e ）	37	① 精進	② 洗練	③ 更新	④ 蒸留
（ f ）	38	① 瞬間	② 論述	③ 倫理	④ 感覚

問二 傍線 g、h に入る漢字として最も適切なものを、それぞれ①～④のうちから一つ選びなさい。

g 抱よう	39	① 揺	② 用	③ 庸	④ 擁
h かん違い	40	① 観	② 感	③ 勘	④ 監

問三 傍線部(1)「この神話がコノハナサクヤヒメとイワナガヒメの神話にびっくりするほどよく似ている」

とあるが、二つの神話の似ているところについて語っている文章には①、そうでないものには②をマークしなさい。

41	植物と岩・石という対立が重要な要素となっている。
42	人間は自由なので、神の決まりに従う必要がないことを語っている。
43	どちらの神話も死の起源について語っている。
44	目に見え、触れられる事柄で、死という抽象的な概念を語っている。
45	失敗は成功の始まりということを語っている。

問四 空欄部分（ A ）に入る筆者の意見として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

い。

46

① 意味もなく長い人生は、逆に人間から自由を奪っていくのであり、限りある人生を意味で満たす努力が大切である。

② 人間の自由とは、何ものにも支配されない意志であり、それを継続する努力こそが、人間の尊厳を形成する。

③ 動物たちの生きる世界から離れてしまった人間には本当の自由はないのであり、世界との共生を考えるべきである。

④ 人間は自由のもとに死を与えられているので、死を迎えるまでは自由に生きていくことこそが大切である。

問五 筆者の意見による神話とはどのようなものか。筆者の意見と同じものには①、異なるものには②を

マークしなさい。

47

神話は、幾世代にも語り伝えられたもので、敬う気持ちが大切である。

48

神話には独特の論理があり、その論理に従っていることが神話を比較することで分かる。

49

神話とは、人間の宗教的な体験に裏づけされた神秘的なものである。

50

神話とは、一般の人が考えるように荒唐無稽な話ではなく、深い世界観を語っている。

